

# 創られた「ふるさと」

## － イングランド歌謡《広い河の流れ》をめぐる言説に関する研究 －

高松 晃子

### Invented Homeland:

#### Some Remarks on the Narrative about *The Water is Wide*, an English Song

TAKAMATSU, Akiko

#### 要旨

本研究の目的は、イングランドの歌である *The water is wide* (日本語タイトル《広い河の岸辺》) が、日本では「350年間歌い継がれてきたスコットランド民謡」であると信じられ、「それがなぜ今、日本人の心を捉えるのか」という問いとともに受容されている背景を明らかにすることである。スコットランド起源説は、日本語版の歌詞の訳者による思い違いに加えて、NHKが制作した2つのテレビドラマ、ブログ、ドキュメンタリーや歌番組の中で反復された結果、拡散し、定着した。2011年の東日本大震災で現在と過去の間に断絶が起こった時、この歌が持つとされた350年という時間は憧れの対象となった。さらに、ふるさとの危機に直面した多くの日本人々は、明治期以来親しんできた「スコットランド民謡」とおとしてスコットランドをヴァーチャルなふるさととして受け入れ、《広い河の岸辺》を声に出して歌うことで、アクチュアルな「ふるさと像」を結ぶことができた。

#### キーワード

スコットランド、民謡、ふるさと、東日本大震災

#### Abstract

*The water is wide* is an English song written and published by an English collector Cecil Sharp in 1906. However, it has often been associated with the Scottish background, in England, in the US, and even in Scotland as well. In Japan, particularly since 2014, it has also been described as a very old Scottish song transmitted for more than 350 years. In addition, it is often followed by the question of why it has so eagerly been accepted in spite of its foreign origin. This paper tries to understand what we have on the basis of this narrative, which could be summed up as follows: 1. The narrative started with a personal misunderstanding by the musician who translated the lyric into Japanese in 2011. 2. NHK spread it through dramas, documentary and the official blogs. 3. The narrative has been circulated on the Internet and is widely accepted. 4. The Great East Japan Earthquake of 2011 activated it. When the real homeland was lost, Scotland substituted it as a virtual homeland. When the continuity from the past was lost, this “350-year-old” song worked as an imaginative past. 5. What has supported the above idea was a sense of affinity toward Scottish songs since Meiji era. 6. Facing the crisis of their own homelands, a lot of Japanese people accepted *The water is wide* as the memory of their real homelands and they actualized what they had expected by singing it out loud together.

#### Key words

Scotland, folksong, homeland, The Great East Japan Earthquake

### 1. はじめに

《広い河の岸辺》という歌がある。NHKが2014年に放映したテレビドラマに使用されたのが評判を呼び、同年7月、日本人歌手「クミコ」が歌って大ヒットを記録した歌である。

英語圏の歌の翻訳版であるこの歌は、しばしば、「スコットランドで350年間歌い継がれた歌」と紹介され、さらには「それがなぜ今、日本人の心を捉えるのか」という問いを伴う紋切り型の説明がなされてきた<sup>(1)</sup>。問いの部分により正確に解釈するなら、「この歌の発祥の地(=「ふるさと」)はスコットランドで、しかもとても古い歌であるにもかかわらず、なぜ現代の日本人

が「自分たちの歌のように」共感することができるのか」ということになろう。つまりこの問いは、350年前と現在という時間の隔たりと、スコットランドと日本という空間の隔たりを暗に前提としている。その上でさらに一般化するなら、「私たちはなぜ、他人のふるさを自分のふるさとのように感じるのか」というシンプルな問いに辿り着く。

ただし実際のこの歌はスコットランド生まれでもなければ350年の歴史を有するわけでもなく、1906年のイングランドで成立したことは、ほぼ疑いのない事実である。つまり、《広い河の岸辺》にとってスコットランドは「創られたふるさと」であり、

350年と伝えられる歴史は、実際にはその三分の一にも満たないことになる。加えて、多くの歌手がこの歌を取り上げてきたことは確かだとしても、それを「歌い継がれてきた」と表現してよいかどうかは甚だ疑問である。

本稿では、《広い河の岸辺》の原曲の成立事情と演奏実績を概観したのち、上のような言説が日本でどのように成立し、拡散し、信じられたのかを、「ふるさと」をキーワードとして考察してみたい。

## 2. 《広い河の岸辺》原曲について

### 2-1. シャープ版とスコットランドの同名歌

《広い河の岸辺》の英語版は、“The water is wide”, “There is a ship”といったタイトルを持ち、1991年のカーラ・ボノフ (Bonoff, Karla 1951生まれ)や、より古くは1958年のピート・シーガー (Seeger, Pete 1910-2014) の録音などでよく知られている。

これらとほぼ同じ歌詞と旋律の組み合わせを持つ歌が初めて現れたのは、1906年の *Folk songs from Somerset* (Sharp & Marson 1906) という楽譜であった (譜例1)。この楽譜を編集したセシル・シャープ (Sharp, Cecil James 1859-1924) はイングランドの民謡収集家で、フィールドワーク先での録音を資料としてピアノ伴奏付きの民謡を多数創作、出版した人物である。彼の採譜とメモによれば、この歌はイングランドのサマセット地方に住む4人の歌い手から採集した5つの異なるヴァージョンを、少しずつ継ぎ合わせて創作された<sup>(2)</sup>。上述の Sharp & Marson 1906 には、“O waly, waly” というタイトルで掲載されている (Sharp & Marson 1906: 32-33)。

#### 譜例1: シャープ版冒頭部の旋律



“waly, waly” とは、深い悲しみや落胆を表現するスコットランドの言葉である。シャープ版の歌詞には一度も登場しないにもかかわらずタイトルに含まれたことが、その後の誤解の発端と言えるが、シャープ自身はこの点について次のように説明している。「サマセットで見つけた歌詞は、有名なスコットランドのバラッド《ウェイリー、ウェイリー *Waly Waly*》に大変よく似ているので、私はこれに同じタイトルをつけて出版しようと思う」 (Sharp & Marson 1906: 76)。

ここでシャープが連想したスコットランドのバラッド《ウェイリー、ウェイリー》とは、スコットランドの歌手・作曲家で、ロンドンで活躍したウィリアム・トムソン (Thomson, William fl.1700-1740) が作曲した *Wale' wale' up yon bank* (Thomson 1725: 34, 譜例2) から派生した数多くの歌<sup>(3)</sup>のいずれかであろう。

#### 譜例2: トムソン版冒頭部の旋律



トムソン版のチューンは現行のものとは全く異なっている<sup>(4)</sup>。イングランドやスコットランドの歌は歌詞とチューンが一对一の関係になく、同じ系統の歌詞に対して全く異なるチューンが組み合わされて伝えられることがよくあるので、この例がそうであるように、歌詞のルーツとチューンのルーツは切り離して考える必要がある。

Kloss の研究 (Kloss 2012) によると、トムソン版の詩は、部分的に、*The unfortunate swain, I'm often drunk, The wheel of fortune, Forsaken lover, The effects of love* といった歌やブロードサイド・バラッド<sup>(5)</sup>に取り込まれていった。そもそも、トムソンの時代には *Arthur's Seat shall be my bed* をはじめ、部分的に同じような言い回しを共有する歌がいくつもあり、そこに新たなヴァリエーションを供給する形で“Waly waly”の歌詞系統は大きく広がったと考えられる。

一方、チューンの伝承ラインは明らかでない。同じような詩が、トムソン版をはじめいくつか異なるチューンで歌われていたはずである。シャープのインフォーマントの中で現行チューンに近いヴァージョンを歌っているのは Mrs Mogg ただ一人である。Kloss は、1904年に録音された Mogg ヴァージョンの前半が採用され、後半はシャープの創作であると考えている (Kloss 2012: ページなし)。

このように、イングランドやスコットランドの歌謡は、歌詞がブロック単位で引用、交換されたり、同じ歌詞に複数のチューンがついたりしながら伝承されてきた。その知識があれば、ある特定の歌詞とチューンのセットが「350年間歌い継がれ」ることなど、極めて疑わしいと考えるであろう。

### 2-2. アメリカとスコットランドでの展開

現代の“*Oh, waly waly*”は、350年前からの伝承ではなく、シャープの1906年版から始まっていることはすでに述べた。「スコットランドで350年間歌い継がれた歌」という言説の後半は、誤りであることは明らかである<sup>(6)</sup>。

では、前半部分について、より詳しく検討していこう。この歌の「ふるさと」をスコットランドとするには、歌詞の一部を Thomson 1725 に由来する歌に見いだすことができる、というだけでは根拠不足である。おそらく、そこにより強力な印象をもたらしたのが、1998年にスコットランドの歌手アイラ・セント・クレア (St Clair, Isla 1952年生まれ) が歌った *When the pipers play* であろうが、それより前にはどのような扱いだったのだろうか。まず、クラシックの作曲家による編曲とアメリカのフォーク音楽界における初期の取り扱いに言及する。

1916年に、シャープ編纂の歌集 *One hundred English folk songs* (Sharp 1916) がニューヨークの出版社から出版されたことで、シャープが採集したイングランド民謡はより広く知られることになった。そこには *O waly, waly* も収録され (Sharp 1916: 90-91), Herbert William Pierce (1931), Robert Chignell (1935), Reginald Redman (1943), Benjamin Britten (1947) といった、クラシックの作曲家による編曲版が出された。これらはいずれも、“The water is wide”ではなく“O waly, waly”をタイトルとしているが、スコットランドとの関連性を伺わせるものは見出せない。

シャープのアメリカ版楽譜はアメリカのフォーク歌手の目に止まり、1950年代に入ると“O waly, waly”の録音が行われるようになった。“The water is wide”をタイトルとしたのは1958年のビート・シーガーによる録音 (Seeger 1958) が最初で、以後、タイトルとしてはこれが定着したようである。しかしながら、この録音が含まれたアルバムの題名が *American favorite ballads* であり、さらに1961年にはアルバムに収録された歌の楽譜 (Seeger; Silber; Raim 1961) も出版されたことは、この歌とアメリカとの連想を強めた。この時点ですでに「ふるさと」のすり替えが起こりつつあったとも言える<sup>(7)</sup>。

その37年後、1998年には、さらに新たな「ふるさと」としてスコットランドが注目された。きっかけは、スコットランドの女性歌手アイラ・セント・クレアが“The water is wide”に新しい歌詞をつけて歌った *When the pipers play* であった。このヴァージョンは、同じ年にアメリカPBSテレビで放映された、ハイランド・パイプの歴史を辿るドキュメンタリー番組のテーマ音楽で、バックパイプの響きをバックにした堂々たる歌唱がスコットランドを強く印象付けた。その2年後の2000年には、スコットランド内外から集まった1万人のバックパイプ奏者とドラム奏者が演奏しながら首都エディンバラを行進するイベント「ミレニウム・パイパーズ」が開催され、そこで *When the pipers play* のバックパイプ・ヴァージョンが演奏された。

もっとも、“The water is wide” = “When the pipers play”のバックパイプ編曲版はそれ以前から存在している。古くは *Nogle danske melodier omsat til saekkepibe* の第2巻 (Zeiler 1966) に“The water is wide”として、1986年の *Bagpipe music* 第1巻に“A Border ballad”として (Livingstone 1986: 28), また、1998年以降には *The church piper* シリーズの第6巻 *Wedding music* (MacDonald 2001) に“When love is found”のタイトルで、さらには同シリーズ第9巻 *Sacred memories* (MacDonald 2003) に“Take up your Cross”のタイトルで掲載された例などがある。スコットランドのバックパイプ奏者の間では、20世紀後半からこの曲がスコットランド起源であると認識されてもおかしくない状況ではあった<sup>(8)</sup>。

なお、日本では宙美 (ひろみ) という歌手が母である伊東

ゆかりとデュエットした日本語版歌唱 (《ふたりの小舟～ The Water is Wide》山川啓介 詞, 宙美 2007) や、白鳥英美子の英語版歌唱 (タイトルは *There is a ship*, 白鳥 1987) いくつかのテレビCM (1990年代の「尼崎競艇」, 2006年の「三井のリハウス」, 2006年の「トヨタ ベルタ」など) に使用された例がある。

### 3. 「スコットランド」言説の成立と拡散

#### 3-1. 翻訳版の登場

日本の女性歌手クミコが歌う《広い河の岸辺》の創作者は、ケーナ奏者・作曲家の八木倫明 (1958年生まれ) で、「スコットランドで350年間歌い継がれてきた」という言説も彼に始まる<sup>(9)</sup>。八木の回想では、この言説にたどり着くまでのプロセスが次のように説明されている。2009年末に自身の新しいCDに入れる曲を探していたところ、2006年にケーナ教室の生徒から手渡された“The water is wide”の楽譜があることを思い出し、インターネットの動画サイトに上っていたカーラ・ボノフの演奏に感銘を受けた。調べていくうちに、この曲がスコットランド起源であること、17世紀のバラッド《ジェイミー・ダグラス》に基づいていることがわかった、という (八木 2014: 52-55)。それを知った時点で、八木の中に「350年前から歌い継がれている」というロマンチックな解釈が生まれたものとみられる。

《ジェイミー・ダグラス *Jamie Douglas*》(Child 204)<sup>(10)</sup> というバラッドは確かに存在している。第2代ダグラス侯ジェイムズ (James Douglas, the 2nd Marquess of Douglas, c1646-1700) と結婚 (1670) した第21代マー伯爵ジョン・アースキン (John Erskine, the 21st Earl of Mar) の娘バーバラ・アースキン (Lady Babara Erskine) が、不倫の疑いをかけられて捨てられてしまう物語で、これらの人物は17世紀に実在した。しかしながら、バラッドそのものが17世紀に遡れる証拠はどこにもない。チャイルドの解説では、関連する歌詞として *Waly, waly, gin love be bonny* (前述の Thomson 1725 の同型) に触れられてはいるが (Child 1880: 92-93), チューンについては一切言及がないため、現行の《広い河の岸辺》との関係は全く不明である。

さて、2010年1月に翻訳を完成し、CDを制作した八木は、プロモーションのツアーに出る。2011年3月11日の東日本大震災以降は積極的に被災地を回り、《広い河の岸辺》の評判に手応えを感じ始めた頃、より多くの人にこの歌を知ってもらうためにクミコに歌唱を依頼する。それが2013年秋のことである。クミコはCD化を期待してライブでこの歌を歌い始めるが、当初はあまり反応がよくなかった。しかし2014年4月、この歌がNHKのドラマで取り上げられてことをきっかけに事態は好転する (八木 2014: 128-141)。

#### 3-2. NHKの戦略

《広い河の岸辺》の歌そのもののだけでなく、「スコットランド

で350年」の言説をも拡散させたのはNHKである。2014年に放映された2つのテレビドラマ・シリーズ、それに付随するブログ、ドキュメンタリー、歌番組がインターネット上のコミュニケーションを刺激し<sup>(11)</sup>、この言説は定着したようである。

まず、2つのドラマ・シリーズについて述べる。いずれも、半年に渡って放映される「朝の連続テレビ小説」として制作されたものである。1つ目は、2014年4月から9月まで放映された「花子とアン」、2つ目は同10月から2015年3月までの「マッサン」である。「花子とアン」は、モンゴメリ (Montgomery, Lucy Maud 1874-1942) による小説『赤毛のアン *Anne of Green Gables*』(1908) を初めて日本語に翻訳した翻訳家・小説家である村岡花子 (1893-1968) をモデルとしたドラマで、《広い河の岸辺》が流れたのは放送開始早々の2014年4月9日であった。主人公花子のカナダ人英語教師ミス・スコットが、故郷にいる別れた恋人を回想しながらこの歌を歌ったのである。ミス・スコットはおそらくスコットランド系カナダ人という設定であったために、この歌を歌わせたのではないと思われる。ドラマのスタッフが開設しているブログの4月11日の記事を見ると、そこには歌っているミス・スコットの写真の下に、確かに「この歌は「The Water is Wide」といわれるイギリス (スコットランド) 民謡です」と書かれている (<http://www.nhk.or.jp/drama-blog/4030/185122.html>)。

ドラマで放送された“The water is wide”が話題になったことがクミコ側にとって追い風となり、《広い河の岸辺》のCD化が決定した<sup>(12)</sup>。それがその年の7月23日に発売されると、USEN リクエスト・ランキング演歌・歌謡曲部門で8週間にわたり1位または2位を獲得した。また、2014年のUSEN-HIT年間ランキングでは第10位、2015年には第9位と、息の長いヒットを記録している。

NHK が制作し、《広い河の流れ》を用いた2つ目のドラマ・シリーズ「マッサン」は、日本人で初めてスコッチウィスキーを生産した竹鶴政孝 (1894-1979) の一生を描いたものである。主人公は、留学先のグラスゴーで知り合ったスコットランド人女性ジェシー・ロバート・カワン (通称リタ, Cowan, Jessie Roberta “Rita” 1896-1961, 役名はエリー) と結婚、彼女を連れて日本に戻る。エリーは劇中でしばしば「スコットランド民謡」を歌ったが、中でも“The water is wide”は最初のドラマですでに馴染み深いものだったため、視聴者に歓迎された。ここで再び、この歌とスコットランドの連想が強固なものになった。

2つのドラマに共通するのは、故郷を離れた者が望郷の念に駆られてこの歌を歌うという設定である。このことは、“The water is wide”という歌にスコットランドとふるさとという2つのイメージを与えた。ただ、ドラマを視聴する限りにおいては、言説の半分、すなわち「350年間ずっと歌い継がれた」ことを想起させる要素は見いだせなかった。この部分を強化したのは、

2014年7月29日放映の「NHK 歌謡コンサート」や、2014年12月12日に放映されたドキュメンタリー「特報首都圏：人生の“広い河”を超えて～中高年に響く希望の歌～」といった、NHK が制作した番組であろう。クミコがゲスト出演した前者では、CD 発売直後であったクミコが「スコットランドで350年間歌い継がれた歌」という紋切り型の紹介をした後、この歌を披露した。後者は日本語版の作者である八木に焦点を当てたもので、仲間のサポートを得ながら苦労を重ねてヒットにたどりついた八木の生き方を、歌詞の内容と重ね合わせる形で描いている。番組の進行役はここでも、おきまりの言説に加え、その歌が今なぜ日本人の心に響くのか、と問いかける。番組中でその答えを導くために参照された大きな出来事が、2011年3月11日の東日本大震災であった。

### 3-3. 東日本大震災と《広い河の岸辺》

東日本大震災が起こった時、ツアーのために東北地方を訪れていたクミコは仙台で被災する。以後、精力的に被災地を回ったり、「歌でつなごう～被災者のみなさんへ」というNHKのミニ音楽番組 (2011年3月19日から同年5月下旬まで本放送) に出演したりして、歌による被災者支援に携わっていた2014年11月23日に仙台で行われたチャリティー・イベント (後述) でこの歌を合唱する企画が始まったのはドラマの放映前であった。つまり、クミコはドラマで歌の知名度が急激に高まる前から、この歌を被災者支援の象徴にしたいと考えていたことがわかる。

実際、《広い河の岸辺》の歌詞は、これ以上ないほど当時の状況に適合していた。以下に掲げるのは、現行版“The water is wide”の第1スタンザに、筆者による日本語訳を付したものである。八木の訳も、ほぼこの内容に沿ったものである。

The water is wide, I can't cross over/And neither have I  
wings to fly

Give me a boat that can carry two/And both shall row, my  
love and I

(川は広すぎて渡れない / 飛んでゆく翼もない)

私たちに船をください / 恋人と二人、漕いでゆくから)

1, 2行目は、まさしく当時の津波被害を彷彿させ、聴く者に諦念の感情を抱かせる。しかし同時に、「船」という希望も見える。2番、3番と歌が進んでゆくうちに、希望は次第に悲しみを打ち消し、被災者にとって大きな励みと癒しをもたらすまでに膨らんでゆく。この歌詞があるだけでも被災者支援ソングとして十分に機能したと思われるが、そこに「スコットランド」「350年歌い継がれた」という言説が加わることで、より説得力が増した。なぜならそこには、震災で失われた「ふるさと」と「過去との連続性」の回復を示唆する象徴的な意味合いが含まれていたからである。

## 4. スコットランドの「ふるさと化」

### 4-1. 現代社会における「ふるさと」の考え方

現代社会における「ふるさと」については、人類学、民俗学、歴史学の領域において、1980年代以降、盛んに議論されてきた。「懐かしさ」や「ノスタルジア」との関わりから新谷；岩本2006や岩本2007は、「懐かしさ」を喚起しながら作り出された新しい「ふるさと」イメージとそれを消費する社会について論じ、石井2007は、ふるさとへのノスタルジアとナショナリズムの関係を考察した。1990年代からは、消費社会における「レトロ」ブームをきっかけに、マーケティング研究においても「ふるさと」イメージは議論の対象となった（例えば Havlena and Holak 1996）。

本稿の冒頭に掲げた、「他人のふるさとをなぜ自分のふるさとのように感じるのか」という問いに対しては、民俗学者たちがすでに答えを出している。彼らの解釈によれば、近代化、都市化の末に自分が帰るべきふるさとを失ってしまった、あるいはふるさとと切り離されてしまった都市住民は、いかにも「日本人の心のふるさと」といった外見を持つ他人のふるさとを、自分のふるさとと同一視する。たとえば、白川郷に観光に出かけようとする者の多くは、「ふるさと」から離れて暮らす都市住民である。彼らは、「日本人の心のふるさと」としての外見を整えられた白川郷の観光パンフレットなどをとおして、美しい過去への憧憬の念を抱き、それを集合的かつノスタルジックに共有する。「ふるさと」はまず、ヴァーチャルな世界において、憧れの感情とともに意識化されるのである（岩本2007: 1）。次に彼らは、実際に白川郷に足を運んでアクチュアルな世界にそれが存在することを確認し、それをあたかも自分のふるさとのように感じる。このように、民俗学の領域における一般的な「ふるさと」議論では、①自分のふるさとの喪失または分離→②ヴァーチャル世界でふるさとを理想化→③アクチュアル世界で他人のふるさとを自分のふるさとと同一視、という3つの段階が想定される。

この図式を用いて、《広い河の岸辺》とそれをめぐる言説が、スコットランドの「ふるさと化」という現象にどのように関わってくるかを考える。まず①に対応するのは、2011年の東日本大震災で多くの人々がふるさとを失ったことである。実際に被災しなかった人も含めて、日本中が大きな喪失感に包まれた。②の、ヴァーチャル世界におけるふるさとの理想化は、「350年間歌い継がれてきた」実績を持つ「スコットランド民謡」に託された。過去との繋がりを失った人々にとって、350年間もの長い歴史は充分憧れの対象となりうる。それが誰によりどのように歌われてきたか、という具体的な知識はなくとも、ドラマで映し出されたわずかなイメージ—故郷を懐かしむ場面で歌われた—から、スコットランドの「ヴァーチャルふるさと化」は集合的に推進された。

では、3つ目の段階、すなわちアクチュアルな世界に「ふるさと＝スコットランド」を確認するためのしくみとしては、何を考えたらよいだろうか。筆者はそれを、「声に出すこと」ではないかと考えるが、その前に、異国であるスコットランドがなぜ、日本人の「ふるさと」の代用となれるのか、その潜在的な根拠について確認しておきたい。

### 4-2. 共有されたスコットランド体験とその喪失

日本人が異国であるスコットランドに集合的かつノスタルジックな憧憬の念を抱くには、ある程度誰にでも共通するスコットランド体験が必要である。多くの日本人が、自分自身も、またその他大勢の人々も共通して体験したり記憶したりしているスコットランド（特に音楽の）体験として、次の3点を指摘したい。

ひとつは、明治期以来、学校音楽教育において積極的に使用されてきたスコットランド民謡を、歌ったり聞いたりしてきた経験である。スコットランドの旋律は、明治時代に20種類以上が日本に移入され、そのうち、13種類程度が唱歌の旋律として採用された。これらは、歌詞を変えて25曲程度の異なる唱歌になった（高松2006-2007: <https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-18520093/>）<sup>(13)</sup>。

2つ目に、代表的な「スコットランド民謡」である《蛍の光》が、卒業式というオフィシャルな行事と結びついて、多くの人々が経験する絶対的な居場所を持ち続けてきたことである。（有本2013: 181-194）。

さらに、卒業式だけでなく、商店の閉店合図や信号機のサイン音、電話の保留音、列車の接近を知らせる音、駅の売店の冷蔵庫が開いたことを知らせる音、などに用いられることで、《蛍の光》以外にも、《故郷の空》《アニー・ローリー》といったスコットランドの歌は日本人の生活に根を下ろしていることである。これらのスコットランド民謡は、教育や社会の制度に組み入れられ、多くの日本人々に開かれたパブリックな場で展開されてきたという点で「集合的」に享受された。

しかしながら、これらを直接的に体験した人の数が減少しつつある現在、スコットランド体験は失われた集合的な記憶として懐かしく振り返るべき対象となっている。例えば、2007年にすでに、卒業式で《蛍の光》を歌わせる小学校は全体の約10%、中学校は15%に過ぎないという報告がある（田中2007: 56）。信号機のサイン音は、音楽ではなく鳥の鳴き声のような音に統一されつつあり、《故郷の空》の鳴る信号機は数が減っている（渡辺2016）。以前は頻繁に耳にしたものの現在は聞く機会が確実に減少したスコットランド民謡は、ノスタルジア感情と容易に結びつくと考えられる。

#### 4-3. スコットランドを「日本人の心のふるさと」にする力学

ただ、かつて多くの日本人の人々によって集合的に共有されていた体験が失われたというだけで、異国文化へのノスタルジア感情を「ふるさと」感情と同一視することは、どのように説明したらよいだろうか。

この問いに対し、次の4点を指摘したい。

第1点は、スコットランドが持つ「周縁性」である。「日本人の心のふるさと」というレトリックは、「西洋」を目指して近代化に邁進した結果の環境破壊や管理社会化が、失われた「日本人」や「伝統」へとその目を向けさせ、多様な欲望が交錯する地点で「日本人の原風景」を結晶化させた結果である（石井 2007: 152）。スコットランドが「日本人の心のふるさと」になり得るとすれば、西洋の先進国から若干立ち遅れているこの地域が持つ周縁性が、その基礎になっていると考えられよう。追いつけるべき完璧な手本というよりは、かつての日本が「後進国」としてシンパシーを感じることでできる、程よい位置にあったのがスコットランドであった<sup>(14)</sup>。

次に、「ヨナヌキ音階」と付点リズム（いわゆる「ピョンコ節」）の共有を根拠として、スコットランド民謡と日本の音楽の親和性を示唆する言説が好まれてきたこと（高松 2006）、さらに、代表的な「スコットランド民謡」である《故郷の空》がまさに「ふるさと」を歌った歌であることも、スコットランドとふるさととの関連を強化したと言える。

そしてもう一つが、スコットランドと「ケルト＝癒し」の結びつきではないかと考える。東日本大震災が起こった2011年の時点ですでに、スコットランドはアイルランドと並んで「ケルト」のイメージで語られるようになって久しく、さらにそれはしばしば「癒し」と結合する（高松 2003: 57-58）。懐かしさ、癒しというキーワードが符合するスコットランドとその音楽は、東日本大震災で本物のふるさが危機にさらされ、過去との連続性が不確かなものとなり、癒しが必要とされた時、懐かしさを振りまきながら「ふるさと」を演じてくれる存在であった。

このように、独特の価値付けをされた「スコットランド」が日本人の人々にもたらすイメージは、真性の「ふるさと」に準ずる「第二のふるさと」あるいは「準ふるさと」とも呼ぶべきものである。もちろんそれはあくまでヴァーチャルな存在であり、「心のふるさと」にすぎないが、国民的な番組と言われる「紅白歌合戦」のおしまいに《蛍の光》が歌われるのを聞きながら、この歌の「ふるさと性」を年に一度再確認する日本人は少なくないだろう。

#### 5. 「声」のリアリティ

《広い河の岸辺》に紐付けられた「スコットランドで350年間ずっと歌い継がれてきた」という言説は、危機にさらされた本物のふるさと及び過去との連続性を、ヴァーチャルな「心のふ

るさと」と、そこに与えられた350年というヴァーチャルな時間に託すための、実に都合の良い表現である。加えてこのレトリックは、《広い河の岸辺》のフォークロリズム的性格、すなわち、ノスタルジーを伴った表層的伝統化（岩本 2006: 2）を強化する働きをもっている。フォークロリズムの現象化、言い換えれば、ヴァーチャルなふるさとをアクチュアルな世界に実現する手段が、「声に出すこと」である。

2014年11月23日に仙台で行われた《広い河の岸辺》の大合唱（女声合唱用の編曲楽譜は八木（監修）2015）は、それを具体的に実現した。「日本のうたごえ祭典 in みやぎ」というイベントにおいて、6000人の合唱団と5000人の聴衆が、クミコと共にこの歌を合唱したのである。リハーサルを終えたクミコは、次のように語った。「被災地の人や、全国から来た人たちが、心をひとつにして唄う。重なる声が多くなればなるほど、この歌は力強さと輝きを増す」（八木 2015: 145）。この大合唱の様子は、前述のドキュメンタリー番組（2014年12月12日NHK「特報首都圏：人生の“広い河”を超えて～中高年に響く希望の歌～」）において、会場と舞台が一体となるような「感動的な」演出とともに放映され、さらに進行役による「スコットランドで350年」というお決まりのコメントが付された。

《広い河の岸辺》の大合唱は、翌年2015年11月7日、大阪・中之島の音楽祭「中之島まるごとフェスティバル」でも行われた。このイベントに先立つインタビュー記事において、クミコは「この曲は古いスコットランド民謡です」と述べ、さらに、この歌を震災復興のシンボルとしていると語った（大蔭 2015）。フェスティバルそのものを紹介した2015年10月26日付朝日新聞の記事は、この歌を「スコットランド民謡」としている（朝日新聞 大阪本社 2015）。

クミコはまた、2015年3月8日に仙台市で開かれた音楽イベント「つなごう音楽の心 震災復興コンサート～クミコとともに～」にも出演した。これは、阪神淡路大震災の被災地神戸と東日本大震災の被災地宮城の生協が協力して開催したイベントで、クミコは100名の合唱団と1300人の聴衆とともに《広い河の岸辺》を歌った。さらに2015年8月6日の広島原爆の日に行われた「原水爆禁止2015世界大会」では、7000人の参加者とこの歌を歌った。この模様を、2015年8月7日付の朝日新聞は「歌手のクミコさん（60）はスコットランド民謡『広い河の岸辺』を披露した」と伝えた（朝日新聞 広島1: 2015）。

クミコが実践した《広い河の岸辺》の大合唱は、350年にわたって保たれてきたヴァーチャルな「準ふるさと」を現出させる手段であった。このような、「フォークロリズムの現象化」の一般的特徴は、現実の日常の「不安」に対して一種のセラピーとして機能すると説明されている（法橋 2003）。この説明は、震災と《広い河の岸辺》の大合唱の関係をよく言い当てている。ふるさとイメージの現象化（＝声に出すこと）は、まさに目の前



にあるふるさとの危機とそこから広がる不安を癒す役割を担った。さらに、スコットランド＝ケルトの音楽に従来から期待されてきた癒しのイメージは、この文脈に正当性を与えたのである。

## 6. むすび

本研究の目的は、大きく分けてふたつあった。ひとつは、日本語版《広い河の岸辺》の原曲の成立事情を明らかにすることと、もうひとつは、この歌のキャッチフレーズとなった「350 年間歌い継がれてきたスコットランド民謡が、なぜ今、日本人の心を捉えるのか」という言説が日本でどのように成立し、拡散し、信じられたのかを明らかにすることである。

八木倫明が日本語の歌詞をつけた《広い河の岸辺》の原曲は、1906 年にイングランドの民謡収集家シャープが複数のフィールド録音を元に作り上げた *O waly, waly* である。にもかかわらず、日本においては 350 年間歌われてきたスコットランド民謡であるとされた。その発端は、作詞者である八木の個人的な思い違いであったが、NHK が制作した 2014 年の 2 つのテレビドラマ、ブログ、ドキュメンタリーや歌番組の中で繰り返されたためにこの言説は拡散し、定着した。

言説の後半部分にある問い、「それがなぜ今、日本人の心を捉えるのか」というレトリックに真実味を持たせている要素はいくつかあり、それらが複合的に絡み合っているが、端的に言えば「スコットランドのふるさと化」が背景にあると説明できる。2011 年の東日本大震災でふるさが危機に晒され、現在と過去の間に断絶が起こった時、この歌が持つとされた 350 年という時間は憧れの対象となった。また、スコットランド民謡は異文化でありながら、教育や社会の制度に組み入れられ、多くの日本人の人々が集合的に享受してきたため、「ふるさとの伝統」としても違和感がない。スコットランドという地域が先進国としての地位に収まりきれないことや、スコットランド民謡が「癒しのケルト」の代表格として捉えられてきたことも、スコットランドが日本人の心のふるさとたり得た要因として指摘できる。

ヴァーチャルなふるさとスコットランドは、《広い河の岸辺》を実際に声に出して歌うことで、アクチュアルなものとして機能した。現実の不安を癒すという「現象化されたフォークロリズム」の一般的特徴は、ここでも充分に発揮された。現実にある危機を仮想の代用物で補い癒しを得る、という人々の一連の振る舞いを、この言説が支えたのである。

なお、ごく最近の高等学校の教科書に、《広い河の岸辺》を「イングランド民謡」と表記したものを見つけた（山本 2017: 96）。今後真実がどのように受け入れられていくか、注目していきたい。

## 注

- (1) 例えば八木 2015 の帯、八木 2015: 146、八木・葉 2015 の広告文 (<http://www.kokudosh.co.jp/special/hiroikawanokishibe>)、クミコのコメント（八木 2015: 148）、オフィシャルサイトでのクミコの CD 広告文 <http://www.puerta-ds.com/kumiko/discography/> などをはじめ、インターネット上に同様の書き込み多数。
- (2) これらの手書きの楽譜とメモは、イングランド民俗舞踊および民謡協会（English Folk Dance and Song Society）のデジタル・アーカイブ“The Full English”で閲覧できる。*Waly waly* については <https://www.vwml.org/search?qtext=Waly%20waly&ts=1502281757572&collectionfilter=HHA;SBG;LEB;JHB;GB;COL;CC;DCD;GG;AGG;PG;HAM;MK;FK;EM;L;MN;TFO;CJS1;CJS2;FSBW;RVW1;RVW2;AW#record=4> を参照。
- (3) これより前に、スコットランドの詩人アラン・ラムジー（Ramsay, Allan 1686-1758）が、自らの詩集 *The tea-table miscellany or, a collection of Scots songs* 第 2 巻（Ramsay 1724）のために引いてきた、“Oh, waly waly”で始まる詩があったとする説がある（たとえば Child 1880: 92-93, Kloss 2012 ページなし）。しかし筆者の調査では 1724 年の初版には見出せず、1734 年の第 10 版の pp.179-180 に存在することを確認できた。ラムジーがこの詩を「古い詩に 編集者 [つまりラムジー自身] が加筆したもの」と分類している。
- (4) トムソンが自ら作曲した可能性もあり、それが事実だとすればスコットランドのフォークロアとも言えない。
- (5) 16 世紀から 19 世紀にかけて特に英国で流行した、片面刷りの新聞に印刷された流行歌。
- (6) マンローによれば、スコットランドのフォーク音楽界でこの歌が歌われるようになったのは、1960 年代になってからである（Munro 1996: 46）。1951 年以降、伝統的な民謡歌手の演奏を中心に録音が続けてきたエディンバラ大学スコットランド研究所（The School of Scottish Studies）のアーカイブを調査したところ、この歌の現行ヴァージョンが *The water is wide* として歌われた録音は、1964 年のゴーディナ・マカロフ Gordeana McCulloch のものだけだった（<http://www.tobarandualchais.co.uk/en/results>）。また 1950 年代のフォーク・リヴァイヴァル以降に出版されたいくつかの一般的なスコットランド民謡集（例えば Hopekirk 1992; Hal Leonard 2001a; McPhee; McVicar; Rankin; Robertson 2009; Buchan 2016）にも、この歌は掲載されていない。世界各地の民謡を集めた Hal Leonard 2001b には、*Oh waly, waly (The water is wide)* のタイトルで、イングランド民謡として掲載されている（Hal Leonard 2001b: 366）。
- (7) ただし、シーガー自身はこの歌について、「何年も前にセシル・シャープがイングランドで収集した歌で、シャープがつけたタイトルは“Waillie, waillie”だった」と述べている（Seeger; Silber; Raim 1961: 77）ことから、彼の中ではイングランドの歌としての位置付けが明確であったことがわかる。
- (8) スコットランド人バグパイパーが書き込みをするウェブ上のフォーラムにおけるやりとりからも、この曲は古いスコットランドのものだと信じられていることがわかる。（<http://forums.bobdunsire.com/forums/archive/index.php/t-93263.html>, <http://forums.bobdunsire.com/forums/archive/index.php/t-94822.html>）
- (9) 八木は、2014 年の自身のブログの中でしばしばこの表現を用いている（例えば 2014 年 8 月 29 日のエントリーを参照 <https://ameblo.jp/duo-quenarpa/archive1-201408.html>）。2014 年の前半、英語圏の歌謡研究者である櫻井雅人は、「The Water is Wide はスコットランド民謡か」という意欲的な論文（参考文献表の櫻井の項を参照）をウェブ上に掲載しており、クミコの CD がリリースされる前に、櫻井から八木に対しこの歌が「スコットランド民謡」ではないことが伝えられていた（櫻井氏から筆者への 2015 年 2 月 17 日付メールによる）。その後出版された八木の著作には、依然として「スコットランドで 350 年」の表記が見られるものの、「スコットランド民謡ではないという説がある」ことにも触れられている（八木 2014: 55-56）。
- (10) 英語圏のバラッドは、研究者チャイルド（Child, Francis James 1825-1896）によって整理され、チャイルド番号と呼ばれる番号が付されている。
- (11) プロナーも述べているように、現代社会においてウェブ上での情報拡散力は凄まじく（Bonner 2009）、2016 年には、ウェブを通して拡散される虚偽のニュースを表す「フェイク・ニュース」という語が目玉された。
- (12) 2014 年 7 月 14 日付の朝日新聞は、新 CD の録音の様子を伝える記事の中で、この歌について次のように説明している。「17 世紀から歌い継がれるスコットランド民謡「ザ・ウォーター・イズ・ワイド」のカバー。ボブ・ディランら多くのミュージシャンが歌い、賛美歌としても知られるが、NHK 連続テレビ小説「花子とアン」で、幼い花子が英語に親し

- む転機となった歌として流れ、話題を呼んだ。」(藤崎 2014)
- (13) おそらくこのような歴史的事実からの連想に基づき、八木は、『広い河の岸辺』が「明治時代に日本に移入されたが翻訳されないままになっていた、それが今、眠りから覚めた」というロマン的な発言もしている(八木 2015: 14; 61)。しかし、その根拠は見当たらない。現行版の初出が1906年であることを考えると、その可能性は極めて低い。
- (14) そのように感じさせる原因としては、かつて独立国であったにもかかわらず、1707年にイングランドに併合されて以来、機会がありながらも独立に至っていないことや、キルトやバグパイプといった固定的なイメージにより、保守的で垢抜けない印象が拭えないことなどが指摘できる。

## 参考文献(著者姓のアルファベット順)

- 有本 真紀  
2013『卒業式の歴史学』東京：講談社。
- 朝日新聞 大阪本社  
2015「聴いて食べて 秋満喫」2015年10月26日付朝日新聞。
- 朝日新聞 広島1  
2015「受け継ぐ 誓いの1日」2015年8月7日付朝日新聞。
- Bonner, Simon J.  
2009 "Digitizing and virtualizing folklore." Blank, Trevor J. ed., *Folklore and the Internet: vernacular expression in a digital world*. Logan, Utah: Utah State University Press: 21-66.
- Buchan, Norman  
2016 (originally in 1962) 101 Scottish songs. Glasgow: Collins. Child, Francis James  
1880 *The Entlish and Scottish popular ballads*. Part VII. Boston: Houghton Mifflin.
- 藤崎 昭子  
2014「クミコが新譜「広い河の岸辺」」2014年7月14日付朝日新聞。
- Hal Leonard ed.  
2001a *The Celtic fake book*. Milwaukee, Wis: Hal Leonard.  
2001b *The folksong fake book: a collection of over 1000 folksongs from around the world*. Milwaukee, Wis: Hal Leonard.
- Hopekirk, Helen  
1992 *Seventy Scottish songs* (Dover Song Collections). New York: Dover Publications.
- Havlena, William J. and Holak, Suzan L.  
1996 "Exploring nostalgia imagery through the use of consumer collages", *Advances in Consumer Research*. 23: 35-42.
- 法橋 量  
2003「記憶とフォークロリズムス」岩本 通弥編『記憶』東京：朝倉書店：228-239.
- 石井 清輝  
2007「消費される「故郷」の誕生：戦後日本のナショナリズムとノスタルジア」『哲学』117:125-156.
- 岩本 通弥  
2006「都市憧憬とフォークロリズム 総説」新谷 尚紀；岩本通弥 編『都市の暮らしの民俗学1 都市とふるさと』東京：吉川弘文館：1-34.
- 岩本 通弥(編)  
2007『ふるさと資源化と民俗学』東京：吉川弘文館。
- Kloss, Jürgen  
2010/2012 "The water is wide": the history of a "folksong". (<http://www.justanothertune.com/html/wateriswide.html>)
- Livingston, William  
1986 *Bagpipe music*. Vol.1. Bill Livingstone.
- MacDonald, Keith E.  
2001 *Wedding music (The church piper, Vol.6)*. Winnipeg, CA: Hiegnells Printing Ltd.  
2003 *Sacred memories (The church piper, Vol.9)*. Winnipeg, CA: Hiegnells Printing Ltd.
- McPhee, George; McVicar, George C.; Rankin, John; Robertson, Stuart  
2009 *New Scottish song book: full music edition*. Edinburgh: The Hardie Press.
- Munro, Ailie  
1996 *The democratic muse: folk music revival in Scotland*. Newbattle, Midlothian: Scottish Cultural Press.
- 大蔭 幸  
2015「歌声 励まし・希望に」2015年9月27日付朝日新聞。

- Ramsay, Allan  
1724 *The tea-table miscellany, a collection of Scots sangs*. vol.2. Edinburgh: printed for the author.
- 櫻井 雅人  
「"The Water Is Wide" はスコットランド民謡か(1)-(4)」  
(1) <http://j-ballad.com/note/160-the-water-is-wide.html>  
(2) <http://j-ballad.com/note/161-the-water-is-wide2.html>  
(3) [http://j-ballad.com/note/182-the-water-is-wide\\_3.html](http://j-ballad.com/note/182-the-water-is-wide_3.html)  
(4) [http://j-ballad.com/note/183-the-water-is-wide\\_4.html](http://j-ballad.com/note/183-the-water-is-wide_4.html)
- Seeger, Pete; Silber, Irwin; Raim, Ethel  
1961 *American favorite ballads: tunes and songs as sung by Pete Seeger*. New York: Oak Publications.
- Sharp, Cecil J.  
1916 *One hundred English folk songs*. Boston: Oliver Ditson.
- Sharp, Cecil J. and Marson, Charles L.  
1906 *Folk songs from Somerset*. Third Series. London: Simpkin & Co.
- 高松 晃子  
2003「日本の「ケルト」受容に関する一考察－「エンヤ」以後の音楽を中心に」『福井大学教育地域科学部紀要 第VI部 芸術・体育学(音楽編)』36: 53-74.  
2006「日本人の音感とスコットランド歌謡－音階とリズムからの考察」『CALEDONIA』34: 71-78.  
2006-2007「日本におけるスコットランド歌謡の受容に関する研究 報告書」科学研究費助成事業：基盤研究(C)：研究課題／領域番号 18520093: <https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-18520093/>
- 田中 克己  
2007「現代の卒業式で歌われる楽曲の調査報告：卒業式と「仰げば尊し」を中心に」『文化科学研究』129(2)：53-59.
- Thomson, William  
1725 *Orpheus Caledonius: or, a collection of the best Scots songs*. London: engraved and printed for the author.
- 渡辺 純子  
2016「横断歩道、減る「通りゃんせ」音響信号「ビヨビヨ」化」2016年10月7日付朝日新聞。
- 八木 倫明  
2015『広い河の岸辺』東京：主婦と生活社。
- 八木 倫明(監修)  
2015『女声三部／二部合唱 広い河の岸辺／思い出のサリーガーデン』東京：全音楽譜出版社。
- 八木 倫明；葉 祥明  
2015『ひろいかわのきしべ』東京：国土社。
- 山本 文茂ほか編  
2017『改訂版 高校生の音楽1』東京：音楽之友社。
- Zeiler, Mogens  
1966 *Nogle danske melodier omsat til saekkepibe*. København?: Marselis Tryk.

## 参考音源

- 宙美  
2007『ふたりの小舟～The water is wide～』徳間ジャパンコミュニケーションズ：TKCA-73188.
- クミコ  
2014『広い河の岸辺～The water is wide～』コロムビアレコードCD：COCA-16910.
- Seeger, Pete  
1958 *American favorite ballads*, Vol.2. Folkways: FW02321.
- 白鳥 英美子  
1987 *Amazing Grace*. キングレコード：KICS-392.

\*以上のURLは全て2017年8月10日に存在を確認した。